

## 伊勢湾沿岸低地に現存する中世建造物

小松原琢 (産業技術総合研究所地質情報研究部門)

### § 1. はじめに

伊勢湾沿岸低地には、中世以降の建造物がいくつか存在する。一方伊勢湾には中世以降数回の津波記録があり、歴史津波の遡上範囲を議論する上で、これらの建造物は雄弁な資料となる。

演者は、伊勢湾沿岸部に現存する中世の建造物を調べている。

### § 2. 伊勢湾沿岸低地に現存する中世建造物

中世に建設された建物は、多くの場合文化財に指定され、建築学や文化財学・考古学的な調査が行われている。伊勢湾沿岸低地に現存する中世の建造物を表1に示す。

このうち、津市の浄明院宝篋印塔は、燈身のみ凝灰質砂岩で、基礎を含むその上下は花崗岩で造られており(図1)、最初に建立された後に何らかの事情によって修復されたと考えられる。この石塔の基礎には文保二(1318)年戊午十月廿一日の刻印がある。

また、愛知県美浜町の大御堂寺(野間大坊)鐘樓の築年代は不明ながら、梵鐘には建長二年の銘があり、江戸時代以前にさかのぼる可能性が高い。

表1 伊勢湾沿岸低地の中世建造物

構造物名	築年代	海岸からの距離	標高(T. P.)
服部家住宅主屋	1576年	1.5km	-1.9m
富吉建速神社・八劔社本殿	室町時代後期	2.5km	-0.9m
観音寺多宝塔	1536年	1.5km	+0.3m
大御堂寺梵鐘	1250年	0.6km	+5.0m
浄明院宝篋印塔	1318年	0.6km	+1.1m

### § 3. 伊勢湾における津波遡上範囲に関する考察

これら建造物が造られて以降、伊勢湾内に被害を与えた津波としては、正平南海地震(1361年)、明応東海地震(1498年)、天正地震(1586年)、慶長地震(1605年)、宝永地震(1707年)、安政東海地震(1854年)が挙げられる。

伊勢湾奥に位置する服部家住宅・富吉建速神社本殿、八劔社本殿および観音寺多宝塔は、いずれも16世紀末期にはすでに建てられていたと考えられることから、天正地震以降の地震では、いずれの津波もこれらの建物までは到達しなかったと考えられる。

一方、浄明院宝篋印塔と大御堂寺鐘樓は建てられたのちに修復されている。



図1 津市乙部の浄明院宝篋印塔

特に津市の浄明院は、中世阿濃津とのかかわりも深い土地にあり、明応地震津波によって損害を受けた範囲を特定することに役立てられないだろうか。

### § 4. 今後の課題

文書史料についていえば、地方の中世史料が今後新たに発見される可能性は限られているだろう。しかし建造物については、今後再発見される可能性は決して低くないと考えられる。

特に津波のような広域災害を復元するにあたって、建造物の存在自体が重要な資料となる可能性が高い。また、文献史料と総合することによって、より具体的に災害実態を復元できるようになる可能性が高い。

建造物は、中世の災害復元にあたって、検討に値する資料と言える。